

てんちさんぎようし

天地賛仰詞 (終祭から五十日祭まで用いる)

ふぎよう

俯仰するに (先唱者、この一句を唱う)

蒼天高く澄み 壤地厚く展けたり 天行は健にして

生生化育の恵沢 遍く万物を潤す 地文は之を享

けて 山紫水明の相を呈すと雖も 落花枯凋の

風氣 時に万象を包む 人身の一代 亦天地の間に

在り 天寿の長幼は不定にして 人智の測り及ばざ

る 処なれども 正大なる天地は 生死を超えて万人

の住処なり 神愛は無量にして 我が生神の御取次

四時常に開かれてあり 神慮は深遠にして 我が

親神の神比礼 四海斉しく隔てあるなし 奇しきか

な 今此の神縁に浴することを得たり 只管身命の

来処を奉謝し 一心に積徳の信行を恪勤し 以て

天地の無窮を賛仰し奉らん 天地の無窮を賛仰し

奉らん。

新霊神拝詞 (終祭から五十日祭まで用いる)

しんれいじんはいし

あなあわれ (先唱者、この一句を唱う)

いとおしきかもにのみたま。慕わしきかもにのみた

ま。偲びまつるも懐かしく。惜しみまつるも限りな

し。みたまの幸を祈りまつらな。心尽くして祈り

まつらな。尊き神のいと子と。天地のなかに生

かされて。生命の限り身を尽くし。心いたずき今

ははや。身退りましぬ今ははや。現に言問うすべ

もなし。あわれ世に在り経しほども退りても。

天地は永久にわが住みか。み心穩いに安らいて。

神慈しみ受けたまえ。み心穩いに安らいて。神

慈しみ受けたまえ。

(繰り返すこともあります)